Ｈ１３．６．２６

第２回 大阪・ミュージアム文化都市研究会

本日のテーマ　　エコ・ミュージアム について

予定

１０：００～１１：１５頃　　大原一興先生による講演

～１２：００過ぎ　　質疑応答

大阪を舞台にした、エコミュージアムの可能性

ゲスト講師

大原一興 （おおはら・かずおき）氏

横浜国立大学建設学科 助教授

日本エコミュージアム研究会設立（１９９５）、理事・事務局長

主な著書

「個室のある老人ホーム」（共著　萌文社）

「ハウスアダプテーション」（共著、住宅総合研究財団）

「エコミュージアム・理念と活動」（共編　牧野出版）

「医療福祉学の理論」（分担執筆　中央法規出版）

「エコミュージアムへの旅」（鹿島出版会）

議事録

＜大原先生によるレクチャー＞

１．エコミュージアムの基礎知識（現在、いろいろな人が解釈したものが「定義」とされている。）

新しいミュージアム（ニューミュージアム）のネーミングの一つ

⇒ エコM、テリトリーM、コミュニティM、オープンM---

発展しつづける存在。循環する運動。プロセスを重要視。地域内で議論を進め概念形成。

概念は 30 年前　フランスから始まる。ＮＰＯが主体となるものが多い。フランスでは 1901 年に日本のＮＰＯ法にあたるアソシアーション法が設立され、その歴史がエコミュゼを生んだとも言える。

自治体からの援助を受けることが多いが、その場合政治に左右される場合もある。

協会組織をつくり、入館料を徴収して財源とする場合もある。営利を追求しすぎるとテーマパーク化する。

☆従来の博物館とエコミュージアムの相違

①「場」：建物ｖｓ地域まるごと　※内外を分ける壁が無い

② 物・収集：切り取った情報　ｖｓ　現地での保全・記憶の収集　※地域の集合的記憶

③ 誰のため？：サービス・教える人・訪れる人が分離ｖｓ住民相互のやり取り

※エコミュゼは、住民・アマチュアでも、各分野での「専門家」。それぞれの知識を交換しあうことで統合化される

☆　３つの構成要素.... ①博物館活動 ②遺産の現地保全　③ 住民の主体的参加

これらが、自然発生的につながる方がエコミュゼらしい。

地域の特性を集約するアンテナ（仏）（日本語ではサテライト、英語ではサイト）がネットワークされる。日本ではコアを持つ、と定義されているが無い場合も多い。

☆ 循環的発展ルーレット

自らを知る→知ってもらう→先入観を取り払う↓

↑ 地域をつくりあげる←対立（利害関係調整）

２．事例紹介（レジメ以外の説明。「エコミュージアムへの旅」から一部補充）

① ブレス・ブルギニョン・エコミュゼ（本部施設とサイト＝アンテナ施設による構成）

フランス・ブルゴーニュ地方の東より。

城を本部施設（県が所有）とし農村地域の豊富な自然資源と文化産業を広範に展示。

＊本部の城には、常設展・ギャラリー・ホールの他、研究室、資料倉庫もあり、博物館機能をもつと同時に、この地方全体の発見を誘う導入機能として、地域にオープンにつながっている。

＊アンテナ自体も点在しているサーキット（ｅｘ．点在する水車が１つのアンテナ）森林、 小麦とパンの館、新聞社（印刷機がある）、ブドウ畑、わら、水　などのテーマ別ミュージアム（アンテナ）が各地域にある。

古いものだけでなく、森の中でのアートなど新しい試みも。

② ベリスラーゲン・エコミュージアム（本部がなく、サイトのみ分散）

スウエーデン

世界遺産を含み、世界最大規模の領域をもつ、鉄の歴史のエコミュージアム

＊ ５０か所のサイトがあり、広大。住民が暮らしながら、サイトを訪ねる。

世界遺産もあれば、何も指定されていない鉱山や鉱道もあり、同等に貴重なものとして保全。

＊全面的に地域を育てるボランテイア活動が支える。（人口１０万人ボランテイア１５００人。東京を覆う広さ）各グループが、全体の活動に参加できるシステム。関係者全員の活動がわかる電話帳、情報交換ができる工夫。

生業に関わりのあるテーマの場合、ボランティアも長続きする。

③ フィエールモンド・エコミュゼ（本部の拠点展示施設のみ）

カナダ （モントリオール）

＊労働者の生活・文化を展示している建物が拠点。

（建物の前身は、公衆浴場・プール→エコミュゼとして改築。展示館を中心に）

資料展示だけでなく、運営コーデイネイト（住民・野菜づくり、コミュニテイガーデンなど）を博物館が行っている。

＊ＭＡＰがない。 （地域全てがエコミュゼであると位置付けている）

＊情報提供として、博物館の専門的カタログだけでなく、コミュニテイ新聞（２週間に１度）を作成し、地域全戸に配布。地域内のできごと、イベント、地域限定性 の高い商店の広告。

＊旅行者はほとんど訪れない。住民が対象。しかし、まちの旅行・観光マップには載っている。（文化観光として文化省から予算がついている）

その他

＊スウエーデン・ノルウエー の国境をテーマにしたもの

（国境を超えて展開されるエコミュゼ）

＊ノルウエーのルーロス。昔銅山であり、木造のまちなみが世界遺産。

汚染された銅山も「負の遺産」として保全

（公害の歴史として、大切にする）

＊デンマーク かやぶき技術の保全

「自分たちが楽しみ学ぶ」という姿勢が基本。

ガイドマップの充実。（どこで、何がされているか、明示）

マニア同士の交流の場 ネットワークの場。

同時にツーリストビューローや学校にも置いている。

外部のビジターは、ツーリストビューローに申し込む。

（ボランテイアガイドは、予約しておけば解説する。この場合、ビジターは無料。ガイドは、自治体から少し手当てが出る）

＜質疑・意見交換 ・日本、都市型について など＞

＊日本型エコミュージアムを創っていきたい（まだよくわからない）

日本への上陸は９５年。日本ではまだできつつある状態。

＊エコミュゼは、地域のアイデンテイテイ喪失の危機感から生まれていることが多い。住民の流動性が高い日本人や大阪人の場合とヨーロッパでは、地域への愛着度に差があるのでは？

＊先例の場合、ＮＰＯが自治体から予算をもらってくるのが８割くらい。

マップ、生涯学習、文化財保全など、お金集めを工夫。
スウエーデンでは、住民はほとんど自分でお金を出さない。フランスの場合は、例えば１人年間１０００円位の会費を徴収、博物館の入館料などを活用。

＊都市型の場合。住民とはだれか？住んでいてまちを誇りに思う人は少なく、仕事に来る人、企業そのもの、遊びに来る人が多い。
基本的には、「博物館の壁をとる」姿勢なので、活動するのは、住民でなくても、地域や仲間を思う人であれば誰でもＯＫ．フランスでは会費を払えば仲間になれる。
（住んでいるひと１００パーセントが地域が好き、という訳でもないから、支える人は外部からの人でもよい。しかし対象は住民）

＊企業博物館については、海外では１つのサイトとして貢献している例が多い。

＊エコミュゼというのは、現時点での姿。プロセスにすぎない。

＊地域が衰微しかけた危機感から活動が起こったケースが少なくない。
エコミュゼを通して地域を見直す学習をし、地域の魅力に気づき、結果として地域への定着率が高まっている例もある。観光客が増加する、といった積極的な経済効果はまだ少ない。（短期的な効果はみていない。何をもって評価するか？が問題）
エコミュゼをやろうと活動する人がいる、ということが効果の１つ。
（産物の売り上げＵＰを目的とするのは、エコノミュージアムであり、エコミュージアムの１つの形態。生産性のあるサイト、ないサイト、両方あってよい）

＊日本の場合、単発で断片的。ネットワークとその重層性が無い。
ここが主体性を持ちつつつながることのメリットを持つ。誰とでもつながれるインターネットの活用も要。

Ex. 隅田区の小さな博物館
小学校の場合でも、目的志向。専門家に各々聞きに行くが、専門家同士の交流・ネットワークはできない。（傘の骨はできるが、布はできない）

☆ネットワークのメリットはなにか
イギリスでは、「エコミュージアム」とは言わない。
イギリス人は、誰かの組織に組み込まれてしまう、誰かの傘下に入ると思い込む。
尊重されつつつながるメリットをわかる人が少ない。日本ではどうか？

＊行政がイニシアテイブをとりすぎで、住民の自主的活動は少ない。

＊年寄りを大事にしないこの国で、活躍する場がない。（年寄りが年寄りに地域の話をしている事実）学校教育と組み合わせるのに、可能性がある？
農村部では、年寄りの知恵が若者・子供にも役にたつ？都会の老人では語るべき内容がない？

＊海外... 常設の母体がある。
日本... エコミュージアム協会のように自立した組織がほとんどない

常設組織体があるのは、山形の朝日町のみである

（大阪は、縦割り行政。博物館はほぼでき、個別に友の会や後援会もあるが、ネットワークはない。大阪市は、ルートマップやトレイルもあるが、あまり知られていないし更新されていない。ボランテイア育成も行っているが、活躍の場が少ない。ばらばらでの活動。一方、ネットワークづくりに対して「大きなお世話」という人も。行政に関係なく、自分達が好き勝手に活動して成功している例も増えてきた。平野まちぐるみ博物館・一心寺　など 。）

＊３セクは、民間と行政と両方わかっている、地元のほこり。その役割が大切になってくるのではないか

この研究会でできること。案

マップづくり、シンポジウム（まちづくり展覧会？）

→ ある程度エコミュージアム的な「場」づくり、可能性はある？

→ その後？？？？？・

参考事例＊世田谷区、杉並区「まちづくり博覧会」

区よりの助成金利用

市民グループの活動をパネル展示。

街づくり活動を見える形でまとめて、同じ「場」で共有する

まちづくりの取り組みを 展覧会として 共有する場をつくる。

パネル展示会。まちづくり組織の大小にかかわらず、同じ大きさで。

平野、寺町、大正、天神橋.....

応募してきた所はマップに反映。

→　キーマン による大主張大会？　シンポジウム

（ 平野のキーマンと寺町のキーマンが手をつないで仲良く活動するとは思えない。それを目的にするのではない。

それぞれの活動や街の魅力を浮き彫りにして、大阪という舞台で広くつないで発信する役割をわれわれが行うべきか？）